羽根ヲトシテ永久ヘノ祈リ

有北真那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽根ヲトシテ永久ヘノ祈リ

【Ｎコード】

Ｎ１７６１Ｒ

【作者名】

有北真那

【あらすじ】

空の彼方にあると云われる、雲に隠れた天使達の都『レシティル』。

幾星霜、人類に限らず命あるモノ全てを導き、裁き、破壊し、創造してきたらしい。

天使達はその都度、その時代に合った姿をしてきた。

地球を支配するモノが人類に移り西暦２０１１年の現在、彼等の姿もまた、人間と近しいものになっている。

近しい、というのは同じとは違う。

彼等が人間と大きく違うとこ。それは、背中に生えた大きな大きな翼だ。
ある天使は雪原を思わせるような純白の翼。
ある天使は桜を思わせるような淡い桃色の翼。
ある天使は汚れ無き海のような水色（すいしょく）の翼。
肌や髪の色は人間と同じように多種多様だ。
そして『レシティル』から今、地上へ降りようとしている1体の天使がいた。

第1羽――降臨

＞i190013―13113＜

絵：FairyTail

作者：有北真那

『レシティル』の中心部『レスピ』には地上へ降りるために、地面に大きな穴がいくつか空いている。

辺りを緑に囲まれ、薄く霧がかかったこの場所にはその1つがある。

「さて、行くか」

淡緑色（たんりょくいろ）の翼を広げ、俺は大きく伸びをした。

「シオン、地上に降りるんですって？」

後ろからの声に俺は振り返る。

透き通るような高い声。見る者を釘づけにするようなプロポーション。三つ編みにされた緋色の長髪。たたまれた銀無垢（ぎんむく）の翼。

そこにいるのは間違いなく、恋人のアリナだ。

「あぁ」

俺は低い声で小さく頷く。

「私に何も言わず？」

目が……怖い。

「悪かったって」

俺は近づいてアリナの頭を優しく撫でてやる。

彼女のムスっとした顔は一瞬でパっと明るくなった。

「人間なんかに恋しちゃダメよ？」

「わざわざ言いに来たのはそんなことか？」
「そうよ」
アリナの唇が一瞬だけ俺の口を塞いだ。
「行ってらっしゃい」
あぁ、旅立つ前にこの笑顔を見れてよかった。
「下は天気が悪いみたい、気をつけてね」
アリナは翌日の天気が分かるほど気温や気圧に敏感なのだ。
そのアリナがわざわざ言うんだ。きっと嵐でも来ているんだろう。
「今回は長期と言ってもただの生体調査だから、心配せずに待っていてくれ」
俺はアリナから離れると穴の前まで行き、淡緑色の翼を一度羽ばたかせる。
「じゃ、行ってくる！」
振り向くことなく、俺は穴へダイブした。
頭から真っ逆さまに落下していく。
ブルーブラックの髪はオールバックになり、あまりの風圧に目を細める。
やがて入口からの光は届かなくなり真っ暗闇な空間となる。その代わりに出口の点のような光は次第に大きくなっていく。
久々の地上はどんなもんかな！
出口を今……抜けたぁ！
し・か・し、そこはアリナの言った通り、いや、言った以上の天候だった。
そう、台風のど真ん中だ。
「くっ、舐めてた……！」
必死に翼を動かすが横殴りの雨に濡れた羽は重みが増し、風に流されてコントロールが利かなくなってくる。
「くっ……そぉぉーーー！！」
俺は暴風雨に負け、されるがままに落ちて行った――。

天使の年齢は人間のおよそ１０倍とされている。
だから２００歳で成人、平均寿命は８００歳と思っていい。
天使の仕事は主に３つ。
１つ目は肉体を失った魂を天界、つまり『レシティル』へ導くこと。だから地上には常に何体かの天使が身を潜めている。
２つ目はその魂を転生させること。これは『レシティル』にいる天使達が担っている。
３つ目は調査。今回のシオンの仕事はこれに部類される。食物連鎖におけるピラミッドの順番を調べたり、天使以外に魂を操作する者――主に悪魔と呼ばれる――がいないかを調べたり……。まぁ悪魔なんて滅多に出会わないから比較的安全で楽な仕事だ。
逆に禁止されていることもある。
１つ目はその姿を決して見られてはいけない。現在では人間にだけ見られなければいいのだが、昔は大変だったらしい。
２つ目は決して地上の生き物と恋に落ちてはいけない。
だが、この禁止事項を破る方法が１つだけある。それは――。

「……ん？」
俺は……そうか、出てきたとこが台風のど真ん中で吹っ飛ばされたのか。
しかし、随分と長い間気絶していたのか？　空は雲１つ無い快晴だ。
ちなみに雲に隠れる『レシティル』だが、光を屈折させるだとか周囲になんちゃら障壁を張ったりとかで大丈夫らしい。そこら辺はお偉い方々が専門で管理してくれてるからよくは分からん。
「で、ここはどこだ……？」

今の俺の状況はというと、雷が落ちた跡のようなでっかい木が背中にあり、それに寄りかかって気絶していた模様。
その周囲は一面の芝が広がり、１０ｍほど先には木々が生い茂っている。
「ここは森の中なのか？」
とも思ったが、たぶん山だろう。そしてここはその頂上。
アリナほどではないが、気圧を感じ取ればここが高い位置だということぐらいは分かる。
「あっ、目が覚めました？」
「！！！？」
俺は言葉を失った……。
見られてしまったのだ。　人間に！　天使である俺を！！
「あの、大丈夫ですか？」
目の前で膝に手をついて俺の顔を覗き込んでくるのは、腰まであるような銀色の髪を垂らす女だ。その髪の色は運命の悪戯か、アリナの翼の色と全く同じだった。
年齢は俺と同じくらい、といったら可笑しいな。俺が２１８歳に対し、彼女は２０歳前後といったところか。
黒いワンピースのようなドレスを着こなし、細い手足、美しく整った目・眉・鼻・ｅｔｃ．．．。
彼女は日傘を差し、俺を太陽から守ってくれている。
「あ、あぁ……」
俺の瞳はなぜかその女性の顔から逸らすことが出来なかった。
「えっと……」
彼女は申し訳なさそうに俺の横へ視線を動かした。
そこにあるのは、そう、淡緑色の俺の翼。
すっかり乾いてはいるが、ダラッと全開に広げてしまっている。
「いやっ、これは！」
どうすればいい！？　言い訳の仕様がない……！
「き……綺麗……」

綺麗……？
「あの、触ってもいいですか？」
アリナのような高い声で、声量は小さいが彼女は少し興奮した様子で目を満丸にしている。
「どう、ぞ……」
どうぞ、じゃねーよ俺！
どうやって切り抜ければいい！？
俺は禁止事項の１つを破ってしまったんだぞ！？
もしも俺の正体が広まったら……、もしも『レシティル』にこのことがバレたら……！
「ふかふか……」
彼女は俺の羽を優しく撫で、とても気持ち良さそうな顔をしている。
だがしかたない。
こいつを……殺すしかない！
「あなたは天使様なんですか？」
「えっ！？」
「大丈夫です。私、誰にも言いませんから」
どうしてだろう。こいつと話していると変な緊張状態になってしまう。
そういえば、アリナと初めて会った時の感覚に似ているな……。
「天使様？」
「いや、俺は、その……」
そう、俺は天使だ。
天使は人間に見られてはいけない。
その処罰は死よりも重い。
――記憶からの消滅――
それが禁止事項を破った者に科される罰だ。
全ての天使の記憶から消される。その天使は存在しなかったことになるんだ。

俺はこのままじゃ……そうなってしまう。
「私、天使様とお友達になりたいです」
「……はっ？」
今度は俺の目が満丸になる。
この女は……俺と……友達になりたい、だと？
『レシティル』で教わったが、翼の生えた人間――天使――を見れば、大抵の人間は恐怖したり、軽蔑の眼差しを送る。
あるいは売り物にしようと企んだり……こいつは、「何が目的だ？」
「えっ？」
しまった……口に出してしまった。
「こんな姿をした化け物を見て「友達になりたい」だと？　お前は何を企んでいる？」
俺は鋭い目つきで女を睨む。
「そんな……私はただ、あなたと友達に……」
「教えてやるよ、俺は天使だ。天使は人間に姿を見られてはいけない」
「あ……じゃあ私……」
「もし見られた場合は……そいつを消す！」
女の前に突き出した俺の右手は、一瞬の光の後に銀色の拳銃を握っていた。
「そんな！　私は本当に……っ！」
驚いた女は後ずさったが、傘が俺の頭に引っ掛かり、逆に引き戻され――
――ゴチン！
俺の額に女の額が落ちてきた。
「っつーーー！」
俺は左手で額を押さえながら、ブレる視界の中で女を探す。
女は――俺の足の上で気絶していた。
人間ってこんなに弱い生き物なのか？

とか思いながら、俺は女の頭に銃を突きつける。
「……ちっ！」
俺は引き金を引くことが出来なかった。
その髪はアリナの翼を、その声はアリナの声を、その微笑みはアリナの優しさを思い出させる。
でも分かってる、こいつはアリナじゃない。
黙って地上に降りようとしていた俺を追いかけ、キスをして、笑顔で見送ってくれたアリナは『レシティル』にいるんだ！
「たかが人間が……何なんだよ！」
俺は右手に召喚させた銀色の拳銃を見つめながら、苛立ちを抑えきれなかった。

第1羽――降臨（後書き）

表紙は「ＦａｉｒｙＴａｉｌ」さんから頂き、加工を加えました。

ｆｒｏｍ．真那

第2羽――友達

さて、困ったもんだ。
俺はあいかわらず焼け枯れた巨木を背に座り込んでいるわけだが、その俺の太腿には女の頭がある。
こいつと俺の額同士が直撃し、この女はあっさりと気絶した。しかも俺に抱き着く形で。
そして俺はそんな無防備な状態の女を殺すこともできず、かといってこのままどっかに行くこともできなかったのでこのような状態になっている。
仰向けにさせ、頭は俺の足の上。芝の上に散らかる長い髪は銀色。黒いワンピースのようなドレス。
よーく見れば……けっこう可愛いな……。
――天使は人間に姿を見られてはいけない――
しかし俺はこいつと出会い、翼を見られてしまった。
そこでこの女は俺に言ってきた。
――天使様とお友達になりたい――
いったい何を考えているのか……何も考えていないのか？
そんなことはどうでもいい。大事なのはこれからどうするかだ！
もし俺の存在がどんどん知られていったら……。
このことが天使達の都『レシティル』にバレたら……。
――記憶からの消滅――
それが俺に科される罰。
これを回避する方法は3つある。
1つ目はこいつを殺すこと。
2つ目はこいつが誰にも話さなければいいい。
3つ目は……いや、これはダメだ。この方法だけは絶対にダメだ！
「う……ん？」

お、目が覚めたか？
「天使……しゃま？」
おい、寝ぼけて発音が可笑しいぞ。
「私のこと……殺してないんですね……」
安心したように微笑むその顔は……ちくしょう、綺麗だ。
「お前が俺のことを誰かに言うのなら……容赦なく殺す」
俺は右手に持っていた銀色の拳銃を女の顔の前に突き出した。
「私は誰にも言いません。だから……私の」
「なぜそんなに俺にかまう？　俺のこれがそんなに気に入ったか？」
俺はゆっくりとした女の言葉を遮り、自分の背中に生えた淡緑色の翼を大きく広げた。
「綺麗……」
女はうっとりしたように目を細めている。
「天使様、私ね……」
女は体を起こして俺の横に座った。
肩と肩が触れ合う距離。
ふわっとなびいた髪からは女の子らしいフローラルな――複数の匂いを連想させるような――香が漂ってくる。
ああ、認めたくないがこいつはやっぱり可愛いよ。
「生まれた時からずっと家の中で育てられてきたの。こうやってお外に出ることを許されたのも最近でね。だから……友達って呼べる人なんていないし、家族やお手伝いさん以外の人を見たのは……天使様が初めてなの」
「初めて人を見たって言ったが、俺は人間じゃない。天使様って名前でもない」
「じゃあ、あなたのお名前は？」
くそっ、また余計なことを言った。
なんでこの女には正直になってしまうんだ？
「俺は……シオン」
「シオンさんですか。あ、私はアリーナ＝サズベルです。アリーナ

と呼んでください」
「……っ！？」
おいおい、勘弁してくれよ。
ただでさえ声が似てるし、髪の色は羽の色と同じだし、同じような優しい笑顔を持ってて、その上名前までか！？
アリナと、アリーナ……か。
ただの偶然だよな？
……そうだ、偶然だ。偶然出会った女が、たまたまアリナと似てただけだ！
「それでね、シオンさん。私はきっとこれからも他の誰とも出会わずに生きていくの。友達って呼べるような人もいないまま、独りで生きていくの」
「……どうしてだ？　お前は何の為に生きてるんだ？」
「私は……この国を治めるサズベル家の1人娘として生まれました。でも女じゃ国を治められいってお父様とお母様は考えたの。だから私は、ゆくゆくはお婿様を貰って、サズベルという名前を途切れさせない為だけに生きるんです。私はただの……入れ物なんです」
「そんな……」
これには、正直驚いた。
こんなに可愛く、綺麗で、優しい娘が……遺伝子を繋げるためだけの入れ物だって言うのか！？
「だから……人間とか天使とか関係ない。私は、私を1人の人間として認めてくれる誰かが欲しかった。ずっとずっとそう思ってたんです。そんなある日、私の目の前に現れたのが……シオンさん、あなただったんです」
女は……、いや、アリーナはずっと独りだった。
誰からも1人の人間として認められずに、家の中に閉じ込められ、物として育てられ生きてきた……。
そんなのが……そんな酷いことがあってたまるか！
「分かった……」

ああ、分かったよ。
掟とかもうどうでもいい。バレなきゃいいことだしな。
「俺がお前の友達になってやる」
俺がお前を認めてやるよ。
でもな、それだけじゃ意味ないんだよ。
天使の俺がお前の友達になっても、それだけじゃなんも変わんないんだよ！
俺は立ち上がって、アリーナを見下ろしながら宣言した。
「俺がお前をここから連れ出してやる！」
アリーナは目を満丸にして驚いている。
急に立ったせいで翼から何枚か羽根が抜け宙を舞い、その内の１枚がドレスで覆われた彼女の膝の上に落ちた。
「お前は入れ物なんかじゃない！　アリーナっていう１人の人間だ！　……そうだろ？」
差し出した俺の手を、彼女を震える手でとった。
俺の右手に拳銃はもうない。アレはアリーナに向けるものじゃない。アリーナの為に向けるものだ！
「ありがとう……シオン」
そう言って彼女は大粒の涙をいくつも流した。
嬉しそうな顔をしながら、笑いながら泣き続けた。

これが俺、シオンと。
サズベル家の入れ物、アリーナの……
フローラルな香に包まれ、天使の羽根が舞う、ちょっぴり塩味っぽい出会いだった。

――お前をここから連れ出す――
この約束の結果、まさかあんなことになるなんて……。
この時は誰にも予測できなかった。
俺にも、アリーナにも。

空にいるアリナにも。
そして……『あいつ』にも。

「あっ、いけない！」
「どうした？　そしてそれは何だ？」
立ち上がったアリーナは……小さかった。
１５０ｃｍくらいしかないだろうが、顔は小さく足は比率的に見ると長い。
まるでお人形さんみたいだな。
そんなアリーナは腕につけた、銀色の枠組みの中に文字盤があるものを見ると驚いた顔をしている。
「シオンは腕時計を知らないの？　時間を知るための道具よ」
「俺達は感覚で正確に時間が分かるからな」
「すごい！　体内時計ってやつですね」
この娘は驚くとすぐに目を満丸にするんだな、分かりやすい。
「それで、今の時間がどうかしたのか？」
「そうだった！　私、もう家に帰らなきゃいけないの……。明日もまた、この場所で会える？」
「あぁ、もちろん」
「良かった、ありがとう！」
満面の笑顔を浮かべると、アリーナは芝の上を駆けていった。
「また明日ね、シオン！」
手を振りかえしてやると、彼女は前を向きなおしてギアを上げたように早くなる。
１０ｍほど先からの森に入ると、その姿はすぐに見えなくなった。
「また明日……か」
何をやってるんだろうな、俺は。
……とりあえず『レシティル』の仕事をやるか。

「王、そろそろご決断を……」
「分かっている！　だが、こんな結婚の仕方……」
「あなたも一国の王ならこのご結婚にどんな意味が……」
「だから分かっている！！」
城の大広間。
その奥に置かれた大きく、豪勢な椅子には1人の男が座っている。
王と呼ばれたその男は、群青色のマントを肩からつけ、頭には金ピカの王冠。
年齢は若く、成人してすぐというところだろう。
王の目の前には片膝をついた、白い顎鬚を大量に蓄える老人がいる。
「召使いの私なんかが言うことではありませんが、先代の王だったお父上様も、その前のご祖父様もあなた様の年齢には既にご結婚なされて……」
「それももう何度も聞いた！」
王も召使いの老人もイライラしているようで、重たい空気が流れている。
「あーもう分かった！　する！　結婚すればいいんだろ！？」
「ついにご決断下さったか！」
「ああ……。『アサルティア』国の王、キーン＝フレバスは……隣国『ディーバ』を治めるサズベル家の一人娘である……アリーナ王女と結婚する」
立ち上がった王はそう宣言すると腹をくくったように凛々しい顔つきになった。
「それではすぐにサズベル家へ、王の直筆の文（ふみ）を持たせた使いを出

させましょう」
召使いは袖から箱を取り出し、３つの鍵を開けると中には１枚の紙とペンが入っている。
それを箱ごと王に手渡し、一礼してどこかへ行ってしまった。
「いいんだ。これで『アサルティア』と『ディーバ』の仲は今のまま平和に保たれ、娘しか生まれなかったサズベル家の人々もお喜びになる。それで、いいいんだ……」
王は首から提げた純金のペンダントのスイッチを押すと、ペンダントの蓋が横に開いて中に収まっていた写真が露わになった。
そこに写っているのは蒼翠（そうすい）の髪をしたツインテールの少女の笑顔。
王はその少女を見て、悲しそうに目を伏せた――。

第3羽――結婚

翌日、俺は昨日と同じくらいの時間にあの木の下へ飛んできた。
雷が落ちたように焼け枯れた巨木の前で、俺はこの国を収めるサズベル家の1人娘と出会った。
容姿だけでなく、名前まで恋人とそっくりの彼女の名前はアリーナ。
俺はアリーナと友達になり、彼女をサズベル家から連れ出すと宣言してしまった。
保証も確証もないがアリーナの生い立ちを聞いてしまったあの時、そう言わずにはいられなかった。
――サズベルの名前を繋げる為だけの入れ物――
お前をそんな詰まらない人生だけで終わらせてたまるか！
俺がお前を、生きることの楽しさを味わえる場所まで連れて行ってやる！
「にしても、来ないな……」
ここに下りてからもう1時間は経った。
会いたがっていたのはアリーナのほうだからすぐに来ると思ったんだが……何か用事でもできたのか？
俺は木を背もたれにして座って空を見上げた。
透き通るような青。
散らばった白。
でも、青も白も場所によって微妙に違う。
明るかったり暗かったり、薄かったり濃かったり。
「俺はずっと、ここよりも空に近い場所で暮らしてたんだよな……」
そんな当たり前のことを考えていたら、だんだんと目蓋が重くなって……ああ、ダメだ……眠い――。

時は遡って今朝。
「アリーナ、起きなさい」
「起きてるってばー、お母様」
アリーナの部屋へ入ってきたのは彼女そっくりでまるで姉のような母。
「何か用ですか？」
アリーナは目を擦りながら、椅子に座っている。
起きたばかりなのだろう。
「あなたに結婚の商談が来ました」
「……えっ？」
アリーナは驚いた時の癖で目を満丸にして固まった。
「着替えを済ましてすぐに王室へいらっしゃい」
そう言うと母である王妃は銀色の髪をなびかせながら姿勢よく部屋を出て行ってしまった。
「どうしよう……シオン」
アリーナは目をつむりながら呟くと、仕方なくゆっくりと着替えを始めた。

――コンコン。
「失礼します、お父様」
アリーナはノックの返事も聞かずに、少し不機嫌さを醸し出しながら王室の扉を開いた。
ここでの『王室』はその名の通りアリーナの父にあたる王の部屋だ。
「話は聞いたと思うが、お前に結婚の申し出があった。相手は『アサルティア』のキーン＝フレバス王だ」
ここ『ディーバ』と隣に位置する『アサルティア』は昔から良い友好関係である。

その為、前々からアリーナの両親とキーンの両親は2人を結婚させるつもりで密談していたのだ。
同い年である2人は早ければ両国が定める規定年齢である17歳で結婚するはずだったが、2人してそれを拒み、特にキーンはこの話になると暴れ出す騒ぎで今日まで日取りがズレタらしい。
しかし2人共20歳を過ぎ、アリーナは自分が王女であることを、キーンは独り身のまま王に即位したことを自覚し、家の為、国の為、他にも色んなことの為、ついにキーンが先に折れてしまったのである。
「仕方ないですよね。私はサズベル家の遺伝子の入れ物。フレバス王と結婚して子供を産むことでしか私の生きてる価値はないんですもんね……」
アリーナは俯いて涙ぐみながら呟くようにそう言うと、父の持つ紙を受け取った。
――誓約書。
両者のサインを書いてその内容を認め、誓うことを示させる紙だ。
「私は……入れ物だから……」
アリーナは震える手で誓約書に自分のサインを書き込み、父に返すと王室を出て行った。
「会いたい……。会いたいよ、シオン……！」
アリーナは急いで城を抜け出し、あの山の頂上へ走った。
「言わなきゃ……。お別れを……ごめんさないって……！」

……お…。

……し……ん。

「シオン！」

「んあ？」
……あぁ、そうだ。
こいつが全然来ないから俺は空を見上げて待ってて……寝てたのか。
「ごめんね、待たせちゃって！」
「気にするな。俺達は人間に比べて寿命が長い」
アリーナはくすっと笑いながら昨日みたいに俺の横へ座った。
今日も黒いドレスだが昨日とは別のものだ。黒が好きなのか？
アリナの翼を思い出させる銀色の髪は少し乱れている。走ってきたのかな。
そして、座る時にまたフローラルな良い香が漂ってきた。
「じゃあシオンは今、何歳なの？」
「２１８歳だ」
「えぇ！？」
また目を満丸にして驚いている。
「そうだよね、シオンは天使様だもんね……」
なんだろう、この感じ。
アリーナのこの横顔。
前にも感じた……そう、彼女が自分の話をした時と同じだ。
悲しみを隠そうとする、自分の気持ちを心の底に押し込めるような感じだ。
昨日は俺自身が興奮してしまったせいでなんとなく感じた程度だったが、今は違う。
アリーナは今、独りの顔をしている。
「何かあったのか？」
俺の質問に、彼女はまたまた目を満丸にした。
どうして分かるの？　って顔をしている。
「昨日いったが、俺達は友達だ。お前は……アリーナは独りじゃない」
「……ぐすっ……」

アリーナ？
「……ふぇ……わぁ……うぁあああぁぁぁぁぁ！」
アリーナは俺に抱き着いて、胸に顔を押し当てて、大声で泣いた。
突然のことで今度は俺の目が満丸になる。
何でだよ？
何があったんだよ？
昨日は笑ったまま泣いてたじゃないか。
何で今はそんなに悲しそうに泣いてるんだよ？
お前の……お前のそんな顔は見たくねーよ！

……。

「……大丈夫か？」
やっと大人しくなったが、まだ俺に抱き着いたままのアリーナの頭を撫でてやりながら聞いてみた。
「うん、ごめんね」
アリーナは泣いてぐちゃぐちゃになった顔を見られたくないのか、俯いたまま小さく答えた。
「話してくれるか？」
俺はできるだけ優しい口調で言い、彼女の返事をじっと待つ。
……。
アリーナは小さく頷いて口を開いた。
「今日はね……お別れを言いに来たの」
お別れ……？
「さっき誓約書にサインしてきたの……。私、結婚するの」
結婚……？
「子供を産むことが私の生きる価値……だから、結婚して、シオンよりもずっと早くに死んじゃうの」
「いいのかよ……？　そんなんでお前は本当にいいのか！？」
俺は拳を強く握って、やり場のない怒りを地面に叩きつけた。

「ごめんね、勝手で……。シオンのことは誰にも言わないから心配しないで」
「そんなことはもうどうでもいいんだよ！　俺はお前を」
「私、シオンと会えて良かったよ……。友達になるって、私を連れ出すって言ってくれた時……すっごく、嬉しかったよ！」
俺の言葉を無視するかのようにアリーナは話し続けた。
「それだけで、私は幸せ。シオンの優しさで……私は幸せ。だからさ……どこに行っても、私は、大丈夫だよ」
何でだよ？
じゃあ何で泣いた！？
何で肩を、声を震わせている！？
何でそんなに苦しそうなんだ！？
「シオンは……お空にいる、シオンの大切な人を……大事にしてあげて」
「お前……」
アリーナは分かっていたのか。
俺にアリナが――恋人がいることを。
「人間の私なんかを……助けてくれて、ありがとう」
「何言ってんだよ……？　まだ……まだ、助けてないだろ？」
「ううん」
アリーナはまだ俯いたまま、首をしかっりと横に振った。
「十分、助けてもらった……。だからね、シオン……」
やめろ……その続きは言うな……！
今すぐお前を背負って飛んでやる！
地球の裏側まで飛んで、誰もお前が知らない世界へ連れてってやる！
だから……！
「ありがと……サヨナラ」
アリーナは最後に、俺に顔を見せた。
涙でぐちゃぐちゃになった顔を、無理して笑顔にさせた顔を。

あぁ、分かってるよ俺。
こんな顔でもアリーナは可愛い。
美人で、優しくて、アリナに負けないくらい可愛い。
アリナによく似たこの娘を俺は助けたかった。
でも彼女は、親に敷かれたレールを、最後は自分から選んで渡っていった。
アリーナは人間なんだ。
天使の俺とは住む世界も、生きれる時間も、何もかも違う。
俺は守れない約束をして彼女を喜ばせ……
彼女の優しさに甘え……
その涙を拭ってやることできにず……
走り去っていく背中を追うこともできない、ただのくそったれヤロウなんだ……。
「アリーナ……」
もう、その姿は森の中へ消えてしまった。
「アリーナ！」
もう、届かない。
俺は彼女を傷つけた。
俺はこの２１８年間、何をしてきた？
女の子１人助けられない……。
俺は……俺は……！
「アリーーーナァァァアアアァァァァーーーーー！！！！！」

その１ヶ月後、『ディーバ』の王女と『アサルティア』の王は両国民が祝福する中で式を挙げた。
近隣諸国への挨拶にも回った。

両国の国境上に新たな城が建てられ、２人はそこで暮らすことになる。
キーンはそんな中でも気丈に振る舞っていた。
だがアリーナは……貼り付けたような笑顔をするだけで、瞳は常に涙を浮かべていた。
時折１人になった時のその顔は、独りのアリーナの顔。
思い出すのはあの人と過ごしたほんの一瞬の時間。
あの人の言葉、優しさ……ちょっとだけしか見せてくれなかった笑顔……。
アリーナは時々、無意識にこう呟いてしまう。
「会いたいよ……シオン」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1761r/

羽根ヲトシテ永久ヘノ祈リ

2011年3月19日00時10分発行